

幕末明治の写真師列伝 第四十四回 内田九一 その九

内田写真株式会社代表取締役会長、内田弘男氏の談話よれば、内田九一の妻「おうた」は花街の出で、内田九一がまだ借金もある「おうた」を連れ出し、いっしょに江戸へ連れて逃げたそうだ。しかし、後年、内田九一は大阪に戻って妻の借金を残らず支払ったという。この大阪時代の内田九一から写真術を学んで交流のあった人物に守田来三という人がいる。『月乃鏡』にある守田来三についての記述を読むと、内田と同じ慶応元年に大阪の高麗橋浄円寺境内に仮寫場を設けて営業していた守田来三は主に大阪の芸子の撮影を得意にしていたようであることから、内田九一はここで芸子をしていた「おうた」と出会った可能性もあるのではないだろうか。

また、『アサヒカメラ』(昭和12年2月号)の松尾轟明「日本写真大年表 黎明編(続)」の西紀1865年、慶応元年乙丑の項に「守田来三、大阪に來り高麗橋通浄圓寺境内に假寫場を設けて寫眞業を創む。内田九一と往來繁し。來蔵と記せる文書多し。」とあることから、この頃、この守田来三が内田九一より写真術を学んでいたのは確かであろう。この大阪時代の内田九一がどんな写真を撮っていたのかはよくわからないが、長州征討に向かう幕下諸藩士や大阪城での調練の写真、名勝を撮影していたといわれている。

「アサヒグラフ臨時増刊 写真百年祭記念号」(東京朝日新聞社)の巻末に掲載された「写真資料展覧会出品目録」の中に、伯爵徳川達道氏所蔵の写真で、「浪華錦城御成橋」(七×八、四) 鶏卵紙 京町奉行大久保主膳正家来寫 大久保主膳正家来と言ふのは、其の実内田九一との説がある。「浪華天満橋網島眺望」(七×八、四) 鶏卵紙 京町奉行大久保主膳正家来寫」とあるこの2枚の写真と、『月乃鏡』の「故内田九一先生」の項に掲載されている写真で、写真説明文に「故内田九一先生と其撮影に係はる幕兵の調練」(慶応元年大阪城内に於て初めて西洋式調練を行ひ兵士は立烏帽子に藁草履を穿ち帯刀にて鐵砲を持つ又太鼓横笛等を用ゆ)とある写真は、大阪時代の内田九一が撮影した写真と思われる。また、前述の伯爵徳川達道氏所蔵の写真リストには「大阪講務所調練城代の組」というキャプションのある写真があり、この写真がこの「故内田九一先生と其撮影に係はる幕兵の調練」の写真を指すものと思われる。また、これとは別に「大阪歩兵調練の圖」

(五、一×二三、五) ハッ切鶏卵紙四枚続キ慶応年間二条城内ニテ撮影」というパノラマ写真がある。これは実際には二条城内ではなくて大阪城で撮影された写真であるが、この写真も大阪時代の内田九一が撮影した写真であろう。『日本写真史年表』の慶応元年の項には、「京都奉行大久保主膳家臣某(内田九一ともいう)「二条城歩兵調練之図」(4枚続き)「慶喜公御滞在京都御旅館(本願寺)之図」「奈良大仏堂」「浪華錦城御成橋之図」「浪華天満橋網島眺望」を撮影する」とあるが、これらの写真が一橋家、伯爵徳川達道家に代々伝わっていることから、内田九一が、写真に関心の高かった最後の將軍徳川慶喜公とも繋がりがあったともいわれているのではないだろうか。

ここで新たに判明したことがあるので、これまでの記述内容から訂正しておきたいことがある。

前回までの連載記事で私は「これは、内田九一の二人の妹のうち、エイが、永見家の分家である永見栄次に嫁いだことから、永見徳太郎の永見家と内田九一とは、遠縁の関係となったのである。」と書いたが、その後の調査でこれが間違っていたことが判った。

まず、「永見栄次」は「永見榮治」が正しい。

次に、「内田九一の二人の妹」ではなくて、「内田九一には姉と妹がいて」になる。このうち、内田九一の妹の方は、名を菊といい、後に長崎市大黒町の品川家に嫁いでいる。

その次に、内田九一の姉の名は、「エイ」ではなく、「セイ」という名で、この「セイ」が永見家分家(旧今籠町29番地。大光寺入口前「永見商店」)の永見榮治に嫁いだ女性であった。しかしながら、『永見家分家過去帳』によれば、この「セイ」は安政6年(1859)9月26日に享年22歳で亡くなっている。法名は聞名院清室妙須大姉、俗名セイとあるので、「セイ」は漢字で書けば「清」という文字と思われる。また、没年の逆算から「セイ」は天保8年(1837)生まれとなるので、内田九一の姉ということになるのである。

さらに、「セイ」は「マキ」という娘を生んでおり、この「マキ」は後に島田胤則に嫁いでいる。島田胤則とは、元は嶋田種次郎といい、長崎の済美館(前身は英語伝習所)で英語の教師をしていた人である。

「エイ」は永見榮治の後妻の方の名前で、元は笠戸如節の娘であった。永見榮治は明治26年(1893)1月11日に享年59歳で亡くなっている。後妻の「エイ」は大正9年(1920)8月28日に享年79歳で亡くなった。永見家分家の墓は、長崎市内の長照寺、後ろ山の墓地にある。その後の永見家分家については、永見榮治→永見倉太→永見榮三→永見太一となり、永見太一氏は、現在は埼玉県さいたま市中央区に住まれている。長崎県商工联合会編『長崎県商工人名録 昭和9年版』(長崎県商工联合会、1934年)には、「今籠町二九 同 卸小 永見倉太」とあり、長崎商工会議所編『長崎商工人名録 昭和16年版』(長崎商工会議所、1941年)には、「今籠町二九 永見商店 永見榮三」とあるので、昭和16年(1941)頃までは、この場所で米穀商を営んでいたようだ。今回の訂正内容についても、この永見太一氏のご教授によることが多い。この場を借りてお礼申し上げたい。

もう一つここで訂正しておきたいことがある。

『永見家分家過去帳』によれば、「万屋町内田家ヨリ入嫁ス自皎院ノ先妻」とあるので、内田セイの生まれは「万屋町内田家」と考えていいだろう。このことを考慮すれば、私は内田九一の生まれを銅座としたが、万屋町の方が正しいと考え直すようになった。内田本家も万屋町にあったことから、内田九一の生まれも万屋町とここでお詫びして訂正したい。

(森重和雄)